

浄土

monthly
JODO
1997・3



1997
3
March

法然上人鑽仰会・発行



テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ
日本テレコム

お申し込み、お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

☎ 0088-82 (無料) または 0120-0088-82 (無料) [受付時間] 9:00~23:00 (年中無休) [インターネットホームページ] <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

名刹を訪ねる

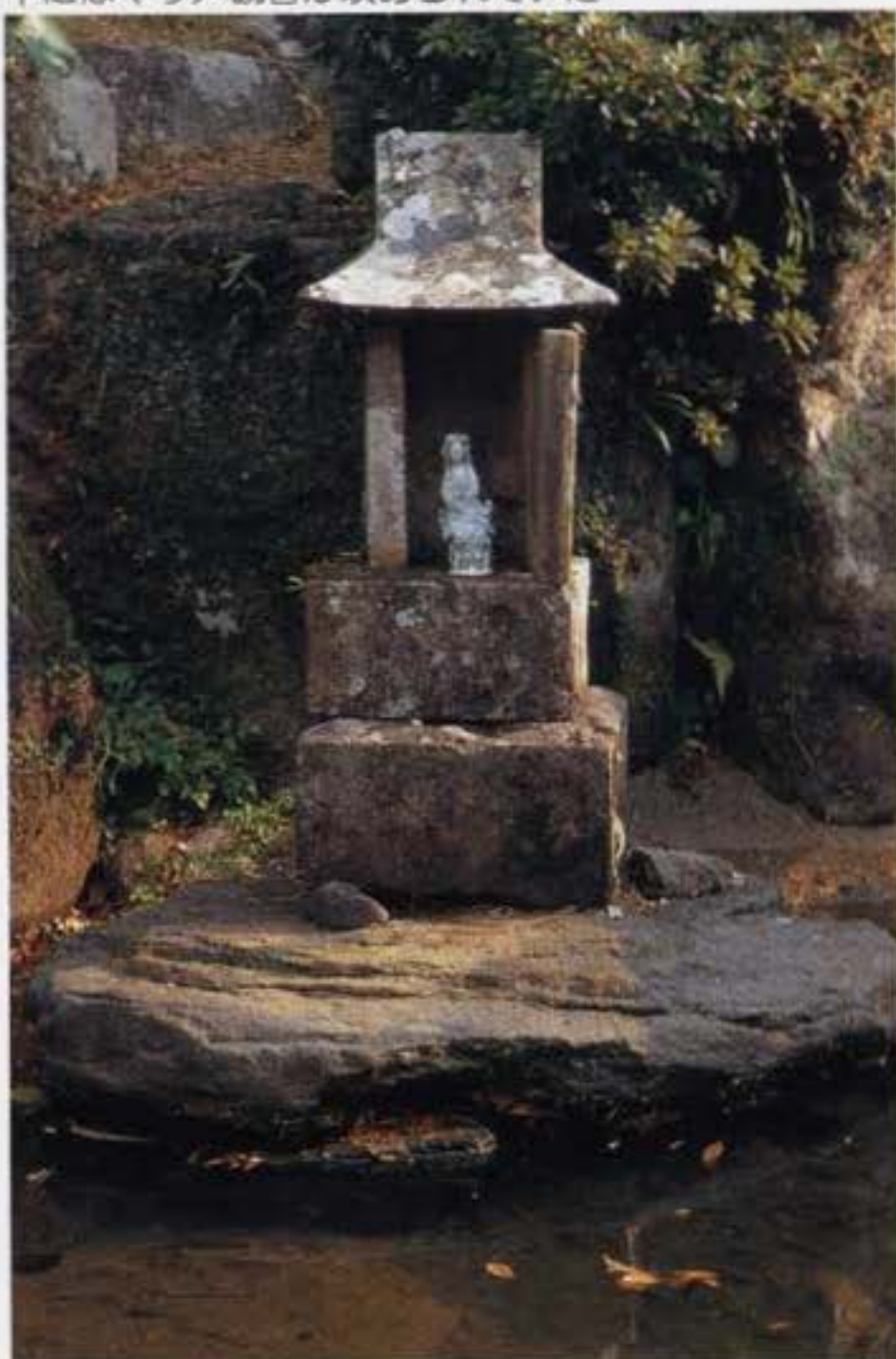
連載

白龍山長安寺

撮影・小堀祐二



中庭に残る石御堂。扉に×の字が彫られていて長い間開けられなかった。中にはマリア観音が収められていた



マリア観音と同じ白磁製の子育て観音、こわれてはいるが、子供を抱いているなど、こちらもマリアを意識している



白龍が住むといわれる中庭と池。アーチの間に石御堂が見える



地元のカレンダーの表紙にもなる長安寺寺宝、白龍の鉢



長安寺の開山、開基の墓は裏山の墓地に並んでいる



阿弥陀さまの立像が本尊



白龍山
長安寺



先代の長男である長安寺住職、田中勝宏さん、
次男の清貴さん、三男の明彦さん。

高台にある長安寺は石垣に支えられている



夕焼けに浮かぶ鐘楼と本堂正面のアーチ

浄土

1997/ 3 月号 目 次



カラーグラビア.....	写真=小堀祐二	3
生きがいを求める.....	仙道作三	8
表紙は語る.....	岡 克己	15
名刹を訪ねる白龍山長安寺.....	真山 剛	16
連載小説「法然上人をめぐる人々」.....	石丸晶子	24
御法語に聴く.....		32
仏教相談.....	大室了皓	36
続 午後の日差しの中で.....	吉川英明	40
日常仏教語.....		47
うまい野菜と料理の話.....	我田 大	48
俳句の未知へ.....	大畑 等	54
若和尚のチョットいいはなし.....		58
いい加減にしろ.....		59
Jフォーラム.....		61
事務局便り.....		69
編集後記.....		70

表紙題字=浄土門主 中村康隆猥下

表紙撮影=岡 克己

アートディレクション=近藤十四郎

生きがいを求める

仙道作三



◇生涯学習ということ

わたくしが生涯学習という言葉を目にし関わったのは、いまから十年ほど前の一九八六年（昭和六四年）の一月、千葉県松戸市の生涯学習大学で「現代音楽を学ぶ」と題して、平均年齢六十五歳という高齢者の方々に、最新の前衛音楽を講義したときであります。

その内容は、音楽大学でもめったにされない、アメリカやドイツやフランスの前衛作曲家の図形楽譜や環境音楽などについて話し、音楽は「オタマジャクシ」に書いたものだけじゃないことを話しました。風や雨の音、小鳥のさえずり、川のせせらぎ。その音に交じって寺の鐘の音があるのです。

また一歩街へでてみると、車のクラクションの音、騒音、BGM、話し声、エレベーターのチャイム、踏切の遮断機の音など、かぞえあげたらきりのないほと無数にあり、それをひとまとめにすると、交響楽のように思えます。このような音を外に出て、散歩しながら聴いて楽しんでください。とサウンドハンティングをすすめました。

音楽は、1+1=2となる単純系の左脳のはたらきではなく、1+1=3になったり4になったりする複雑系の右脳のはたらきなんだと、つまり理屈や計算ではできない、豊かな感性をもって、表現したり、鑑賞したりするものなのです。

こうした話が分かって分るまいが、高齢者だからといって小学生のような扱いはせ

ず、わたくしはかまわず難しい話をしました。三百名ほどの受講者が真剣なまなざしで、熱心にメモをとる姿を見て、人間は生涯、学習なんだなあ、と若いわたくしが逆に教えられました。

終戦前後の混乱期に、学習したくてもできなかった時代の人々と、現代のように学習環境がいくらでもととのっている現代っ子との違いなのか、学習するということこそ意気が、高年齢者と低年齢者が、逆転しているように思えたのです。

それから十年たった今、生涯学習はますます重要な意味を持つてきました。まずひとつには、中高年齢者の「ボケ」が社会問題化してきました。その人たちの脳をレントゲンで見ますと、はたらいっている左脳は、透明に写っていますが、はたらかせていない右脳は、真っ白に写っています。

こうした現象は、企業戦士やキャリアの人たちに、多くみられるようです。これを解決するには、右脳のはたらきを活発にさせるのが、一番良いとされています。

また、ペーパーテストだけで人格をみとめられた人たちが、いま世相を騒がしています。が、この人たちの倫理観はいったい、どうなっているのでしょうか。

平成八年十二月五日、読売新聞の夕刊一面に、「国家公務員に倫理教育たっぷり」と大きく見出しがついて、いままでの初任者研修が九日だったのを、あらためて三か月にするという。その研修期間中に、福祉施設でのボランティア体験、意欲的なまちづくりに取り組

む全国の市町村への派遣研修。これらを通じて、地域の住民と直接触れることにより、市民の立場に立ったモラルや行政の実践能力を養成したい考えだといっています。

ひと昔前では、こんな倫理観はあたりまえのこととて、大学で教養を身につけた人間に、あらためて倫理教育をしなければならないなどとは、考えられませんでした。たったの三か月間の研修では、倫理観が身につくとは思われません。そのためには、こうした人たちにも、年少から生涯学習をとおして、社会教育や宗教教育をしてほしいと思います。

わたくしは日本の創作オペラを作るのを仕事としていますが、昭和三五年に中学を出ると、東北の秋田から集団就職で上京し、働きながら勉強しました。その後良い師に出会い、いまのような仕事ができるようになったのですが、町工場で汗を流し労働して過ごした八年間は、とても良い社会教育を受けたような気がします。これも大きな意味での、生涯学習だったのではないでしうか。

◆縄文ページェント

生涯学習は、一九六〇年に国連で提唱されたそうですが、それを受けて日本では、一九七〇年代になってから動きだします。が今から七十年前に、つらい労働だけがのこる農民に、レコード鑑賞会や弦楽合奏や劇など、心を豊かにする活動をした宮沢賢治は、生涯学習の指導者だったと思います。

わたくしも賢治の有名な詩「雨ニモマケズ」を作曲して作曲家となり、賢治の思想を大きく受けました。その後、秋田県琴丘町の遺跡から出土した、縄文の土笛がとりもつ縁で、人口六八〇〇人の町の、新しい郷土芸能の創造を、てがけることになったのです。

町では縄文文化を学び、さらに生かすため、生涯学習の一環として、町民の総参加をあいことばに、楽しむ、感動する、創造するをコンセプトとして、縄文ページェント（野外劇）にとりくみました。

雪解けの春から豊穣の秋までを「縄文人が歌い踊る」新しく作曲された世界と、延々と伝承されてきた《労働歌》や《童謡》や《御詠歌》、それに《ささら》や《番組》などの郷土芸能をミックスした、町民芸術の創出をねらいました。

これを実現するために琴丘町では、官民一体となった「縄文ページェント実行委員会」を組織してのぞみました。わたくしもこの計画が、町民のかたがたに理解してもらえらう、可能なかぎり出かけて対話しました。

雪の降りしきる山間部の集落では、お年寄りがつつましく暮らしていました。子供たちは農村を離れて都会へ出て行きます。わたくしもその一人だったのですが、現在、日本国中の村々では、この現象が続いていて、閑散としています。

そこで活力をあげたい。とわたくしのおせっかいがはじまりました。何としても、この人たちに舞台に立つてもらおう。もう一度、若い人たちと共有の場を実感してもらおう。

そして町の活性化にひと役をにない、生きざまを示してもらいたい。と願ったのです。

やがて三年後、稽古をつみ、リハーサルをかさね、間口三十メートル、奥行一八メートルという特設舞台が山の中に、町民の手で造られました。また舞台や衣装や小道具や土器楽器の製作のすべてが、町民の手作りなのです。

裏方さん三百名が準備したその会場で、平成八年八月、小学校一年生から八十三歳のお年寄りまで、三世代の人々が千百名出演し、文字どおり日本一の、一大ページェントを繰りひろげました。(さらに平成九年八月にも開催予定)

その一大ページェントをみようとして、全国から五千名もの観客がやってきました。その大観衆の前で、三百個のフットライトを浴びて、一心不乱にみごと演じきったのです。

われんばかりの大拍手が惜しみなく続き、みごとやり終えた感動に、舞台上では大勢が涙しました。ご老人がたの多くは、先生、冥土の土産にありがとう。生きがいを与えてくれてありがとう。生まれてはじめて感動しました。とその歴史を刻んできた頑丈な手で、わたくしの手をちぎれんばかりに、力いっぱい握り締めて、はなしませんでした。

その手から伝わってくる温もりは、まだ自分は社会で必要とされているんだ。まだやれるんだ。という訴えているようでもありました。わたくしもまた、それを実感して、だいたいな仕事をさせてもらい、ほんとうの生きがいを感じとったような気がします。

これから高齢化社会が一気にやってくるわけですが、またどんな社会現象があらわれるか、だれにも予測はできません。ただ言えることは、家に閉じこもらず外に出て、適度な刺激を受け、活力のある生活をおくることが、前提のようです。

そのためには、生涯学習で何か趣味や生きがいを見つけるのも、ひとつの方法だと思います。わたくし自身、生きがいとは何か、と問われた時、理論的に定義できる具体的な意見は持っておりません。古今東西の哲学者が、これまでこのことについて、さまざま論じてきました。しかし決定づける論証はないような気がいたします。

人はそれぞれ百人百様の生き方があり、生きがいの求め方もまた、百人百様があると思うのです。結局のところ、わたくしたちは生きがいを追い求めるために、求道者として生まれてきたのではないでしようか。

いま全国の自治体には立派な施設があり、各種の講座が開かれて大いに賑わいをみせています。そこで様々な考えを持った人々と出会い、触れ合ってほしいと思うのであります。そうした中からも、何か糸口が見いだせるのではないでしようか。

(オペラ作曲家・エッセイスト)

表紙は語る

灯台

撮影●岡 克己

闇を照らす光

闇の夜
漆黒の荒涼たる海に
投げ出され揉まれつづける一隻がある
波の音、船体の軋み
すなわち長い航海の疲労と不安
が頂点に達するとき
遠く、微かに
一条の光が見える
驚愕
わき上がる希望
生かされていることへの歓喜
光は次第に太く強く眩い力となって
船を包み込み
確かな航路へと導く

灯台
長い歳月を越えて
聳え立つ塔

室戸岬灯台(高知県)

地名は「むろとみさき」だが、灯台名は「むろとざき」と読む。四国の最東端に位置し1899(明治32)年4月1日に完成、点灯。その後、1934(昭和9)年の室戸台風でレンズを破損。修理をしたが鉄造りの灯台は、ほぼ設置当時の状況で現在も活躍している。

1917(大正6)年に電化。位置、北緯33度14分38秒。東経134度10分42秒。



岡克己プロフィール■1948年岡山県倉敷生まれ。風土写真家、中村昭夫氏に師事。『Aqua21』に連載された『水のある風景』が高い評価を得る。灯台はライフ・ワーク。全国120カ所、2000枚に及ぶこれらの作品はCD-ROM『日本の灯台 第一集』(発売/ジェイ・ブレジデント)として好評発売中!!

白龍山長安寺

連載

名刹を訪ねる

真山剛



「キリシタンという迫害というイメージが強いのですが、実際はまず仏教がキリシタンから迫害されたことから始まるのです」

取材がお寺の話から長崎や諫早、そしてここ大村の歴史へと移ると、長安寺田中勝宏住職はキリッとした口調でこう言った。

「もし、あの当時家康をはじめ徳川家がキリシタン弾圧という政策を徹底していなかったら、ここ長崎はオランダ領やスペイン領になっていた可能性だってあるんです。笑い事ではないのです」

歴史の教科書が史実をどれだけ正確に伝えているか、という論議はさて置き、過去の事実を正確に残すことは簡単なことではない。芥川龍之介の「藪の中」ではないが、たったひとつのでき事が当事者ですら幾通りにも解釈されるのだから、時代が経るとまるで大樹の枝葉のようにいくつもの解釈が生まれるのは仕方のないことなのだろう。

しかし、田中住職がいう、大村をはじめ長崎県におけるキリシタン弾圧が、実はキリシタンによる寺院の焼き打ちから始まったというのは、教科書に載っていないが、まぎれもない事実なのである。

『大村史話続編Ⅰ』によると日本初のキリシタン大名である大村藩の大村純忠（すみただ）が築いた三城城周辺には南都仏教とつながりのある寺院や真言宗の寺院など、十三もの寺院、そして二つの神社があった。この地は十四世紀中頃には大般若経が五年にわたり写経されるなど、篤く仏教に帰依する土地なのだ。

地元大村出身の力道山の墓がある。
力道山の本名は百田光浩という



この大村の寺院がフランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸してから二十五年後の永禄七年、一五七四年までにキリシタンによって焼かれたり、壊されたのである。そしてその焼かれた寺院のひとつ、真言宗竜宮寺と同じ高台にキリシタン大名大村純忠の三城城が築かれたのである。

長崎の港を始めいくつもの港を開港し、海外とのつながりを持ち、世界に大名という言葉を知らしめた大村純忠だが、純忠が自らの大村藩が大きな藩に囲まれていて、藩を守るために海外からの武器や薬を手に入れるためにキリシタンになったのか、それとも信仰心からキリシタンになったのかはともかく、ザビエル上陸から十四年目という早い時期に洗礼を受けたキリスト教の信者であったことは、間違いない。

その純忠の長男、喜前（よしあき）が建立したのが、その竜宮寺跡に建てた白龍山靈光院長安寺である。慶長十四年、一六〇九年に純忠の娘おふく姫を開基とし、九誉礫道上人を開山とする。カララグラビアの頁をご覧いただきたいが、数ある寺宝の中でも山号ともなった白龍の鉢が何と言っても長安寺の宝物である。この鉢は開基おふく姫の愛用の鉢で、この鉢に水を入れて雨乞いすると雨に恵まれたというもので、安永七年、一七七八年に長安寺が全焼した時も奉納されてあったはずのこの鉢が、疵ひとつない状態で中庭の池に沈んでいたという。鉢に浮き彫りされている龍が難を逃れるために

池に飛び込んだのだろう、という話が伝わっている。

また本尊の木造阿弥陀如来立像も平安後期のもので、焼き打ちなどで寺社がなくなった大村領内で最古のものとされ、これも白龍の鉢同様、市の指定有形文化財だ。

さて、こうした寺宝とともにこのお寺の成り立ちの特徴を今に伝える寺宝がまだある。白龍の住む池の横にたたずむ石御堂に収められていたマリア観音と子育て観音だ。

昭和三十六年五月二十九日の西日本新聞にこんな見出しがある。

『お寺の石御堂にマリア像／扉開くな』言い伝え／隠れキリシタン三百五十年前?のもの』

記事を抜粋してみよう。

「長安寺は四面菩薩を祭神とした古い寺だが、天正二年（一五七四年）耶蘇教徒のためにこわされた。それを大村純忠の長女拾二九姫（おふく姫）が慶長十四年（一六〇九年）建立している。建立の名義は耶蘇退治のためということになっているが、大村純忠はキリシタン大名であり、拾二九も洗礼を受けていることから、浄土宗に帰依したとはいっても裏を返せば長安寺にはマリア観音がひそかにまつられ、信者たちの祈りがささげられていたのではないかとも見られる」

建立はおふく姫の弟にあたる喜前だが、この喜前も洗礼は受けてはいるものの何度も棄教している。大村は「郡くずれ」といって喜



書院の横のお地蔵さま。イボ地蔵などいくつもの地蔵が並ぶ



長安寺第三十世、田中勝宏住職

前の三代あとの藩主純長の萬治元年（一六五八年）、七月に六百八人の隠れキリシタンが捕まるという事件が起きたところで、天正十五年（一五八七年）の豊臣秀吉のキリスト教禁止令が出される以前の純忠の頃には、日本のキリシタンの約四割にあたる七万人のキリシタンがいたという地である。喜前が浄土宗のお寺を建立したといっても、それは大村藩存続のために徳川家の顔色を伺わなくてはいけなかったからで、多くの隠れキリシタンがこのマリア観音や、同じマリア観音の子育て観音をお寺にこっそり安置し拝んでいたに違いない。しかし、大村、長崎、諫早に五人の僧侶を派遣しキリシタンによる寺社の迫害の実態を把握した徳川家康は、慶長十九年（一六一四年）に全国的禁教令を出し、全国的なキリシタン弾圧となり、やがてキリシタンは激減していくことになる。大村もそうした中で「郡くずれ」を起こしたのだ。

ちなみに扉開くなという言い伝えを破って、石御堂を開けたのは寺の者ではなく、先にあげた『大村史話続編Ⅰ』を発行している大村史談会のメンバーだったという。

つまり住職は歴代、この教えを守り続けてきたというわけだ。

さて、長安寺はこうした大村という地に、四つの末寺を持つ寺領三十六万石という徳川家の領内寺院として建立された。現在は第三十世の徳蓮社慶譽勝宏上人が住職としてお寺を守られている。先代である父、清巖前住職が戦争に勝つようにつけた名前が勝宏で、

長安寺を支えた、鯨とりの深澤家の墓。大村市の指定史跡になっている



昭和十九年の夏の生まれだ。弟さんが二人いて、清實さん、明彦さん。そして現在は兄弟三人ともお寺の仕事をしている。そう三人ともお坊さんだ。

また先代住職もお元気で、吉水流詠唱教導司として講員さんの指導養成に専念されている。さらに長安寺には現住職の兄弟子でもある役僧さんを含め総勢五人でお寺の事に携わっている。

というのも大村には長崎空港もあり、高速道路もある。その上国立病院、自衛隊や多くの学校があり、全国で最も所帯数が伸びている市だという。昭和四十八年に先代住職が本堂を建て直した時に比べると檀家さんや信徒さんも増えていて、それこそ家族総出でないとこなせないということだ。

しかし、弟二人は最初から僧侶という訳ではなく、次男、三男とも事故での入院がきっかけで僧侶になったという。次男の清實さんは何と二十八日も意識を失う事故のあと、僧侶になった。

「おかげさま、という気持ちになったのです」と清實さんは当時を振り返る。

僧侶五人でこなす行事は多い。一月は「寒修行」で檀家さんや信徒さんの家の戸口で詠歌を歌い托鉢するという。七日間というから大変だ。また「正五九の百万遍の数珠くり」がある、これは旧暦の正月、五月、九月の行事で新暦では二月、六月、十月で、一年の祈願、豊作の祈願、収穫への報恩のための行事という。

石炭壘子

その妻

大時四郎実太

【第三回】

この他にいくつも行事があるのだが、年末の除夜の鐘は参拝者全員に鐘を撞いてもらうので、撞き終わるのが夜中の三時ぐらいになることもあるという。またどんな行事の時でもお寺に來た方に食事をだすという。婦人会の手伝いがあるので何とかやれていますと住職は言うが、本当にこれは奥様やお手伝いの方たちにとって大変なことだと思う。多いときは四百を越えるというから、これはもうプロはだしの仕事だろう。

法事でお檀家さんや信徒さんの家に行くと、だいたい一杯御馳走になることが多いという。実は今回はわたしたちが御馳走になったのだが、高校時代に甲子園へ行き、大学時代には空手をやったという住職はまさに九州男児。

色々話が進む中でその心意気にも酔ってしまった。

「やっぱり最後はハートです。何をするにもハートがなければいけない。ありがとう、おかげさま、これがハートです。」

子供たちの空手道場を開いていますが無理やりやらせてもだめ。飽きさせずに続けさせていると、自然と黒帯が気になり出してくる。そうすればしめたもの、自分から頑張りはじめ。

気持ちを、心を熟させることが大切なんですよ」

信仰が目まぐるしく変わった長崎・大村の地で、信仰のもととなる「心」の大切さを住職は語ってくれたのだ。

今夜も杯がすすみそう。

(ルポライター)

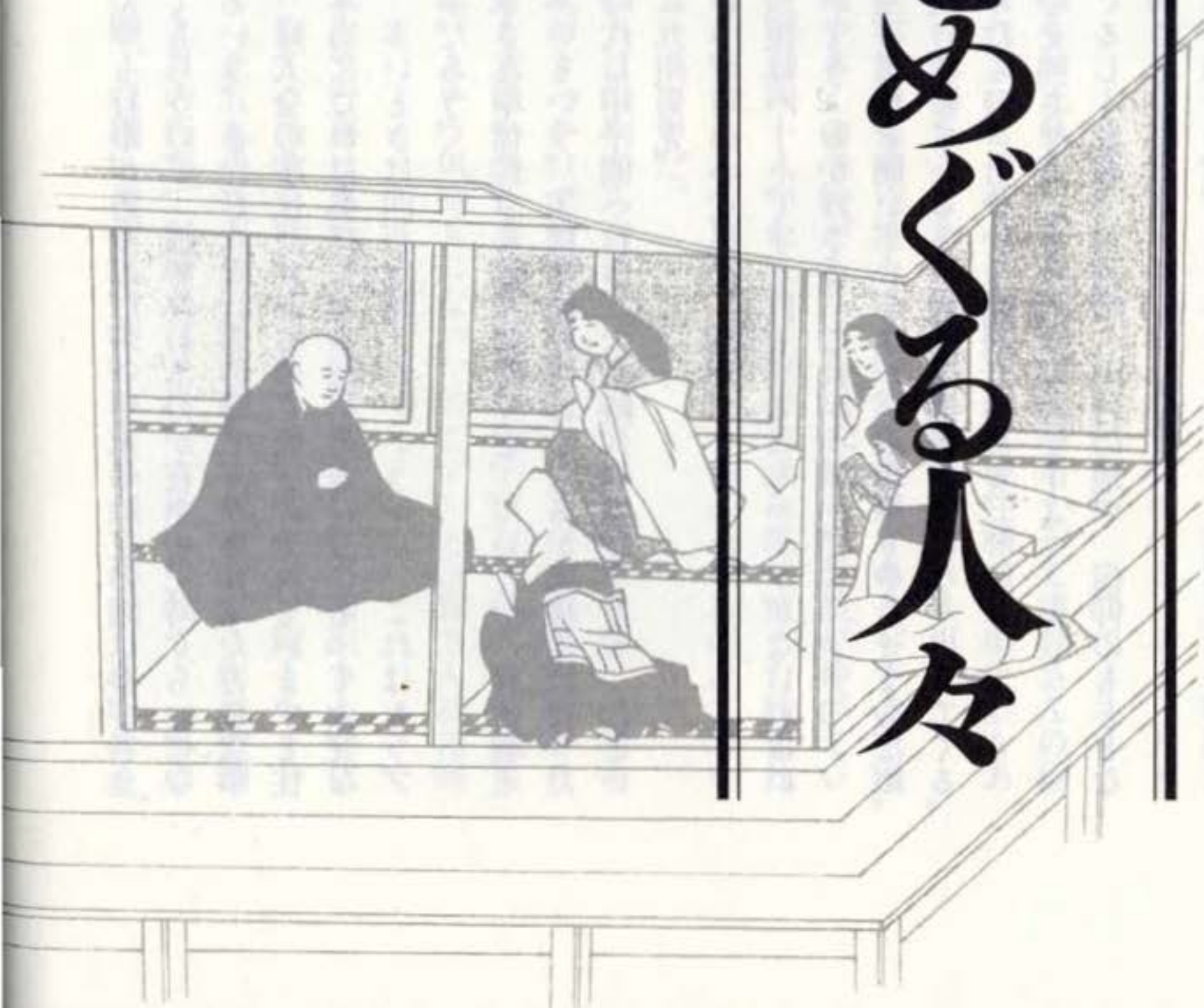
連載小説

法然上人をめぐる人々

〔第三回〕

大胡四郎実秀と
その妻

石丸晶子



六

「佐代、それは護らなかつたのではない」

乾いた声で実秀は妻をさえぎった。

「悪心だ。人間の悪心が仏の慈悲の手を撥ね退けるのだ」

「……」

「わしが今、悪心をおこして、罪のない郎従を切つたとする。郎従はわしの大刀の下に倒れるだろう。そこに弥陀が姿を現わして郎従を守ることはせぬ。それが人間界の相なのだ。しかし、悪心をおこしたわしは、確かに来世では裁かれる」

「……」

「それにしてもそなた、よう言うてくれた」
しばらくして実秀は言った。

「殺人なしではすまされぬ乱世の武士の身。もとより桐生ごとき卑劣なことは誓つてしたことではないが、先の西国での戦さには、敵の首を掻き切つたことも五度、六度にとどまらぬ。掻き切らねばこちらが切られる。これが

戦さの習いだ。まこと罪深いことではないか。わしに殺された平家方の武士の家では、さぞかし夫や子を殺した男のわしを、恨んでいよう」

実秀の心に、敵味方互いに乱れ合つて戦う、合戦の場が甦つてきた。

喚き叫ぶ声は山をひびかし、馳せちがう馬の音は雷のごとく、射違ふ矢は雨の振るにひとしい。

薄手を負つて戦う者、引つ組み刺し違えて死ぬ者、取り押さえて、首を掻く者掻かれる者。

かたわらの妻を忘れ、思わず合掌すると、彼は低くなむあみだ仏を称えた。

「戦場だけではないのだ。合戦が終つてから、わしは京都の守護にあたつていたが、そこで見たのは、佐代、人間の業の深さよ。恐ろしさよ」

いつしか夫婦は、互いに向かい合つて語つていた。

「京都では平家の残党狩りがきびしうてのう。

北条殿が、平家の公達を見つけた者には、賞金をはずむと触れられたのだ。するとどうだ。町屋の子で眉目の美しい子を町ぐるみで捕えては、六波羅探題に突き出すことを始めたのだ。その子の親が泣きさわぎ、これは公達どころか長屋暮らしのわが子ですと訴えろと、乳人が公達をかばっているのだと町びとは言う。

「まあ、恐ろしいこと。で、どうされたのでございます」

「少しでも疑いがあれば、これを生かしてはおかぬのが北条殿のなさり方だ。その子は即座に庭に引き出され、訴え泣く父親ともども首を撥ねられた。が、あとでわしが調べてみると、その子はたしかに平家の公達などではないわ」

「……」

「それが今の世よ。乱世なのよ。子を腹に妊なごつた平家方の女人を見つけると、北条殿は腹をかつ切って中の子が男か女か調べよといわれもした」

「恐ろしい。それは鬼でございます。鬼のすることでございます」

「そうよ。乱世が人を狂わせるのよ。人の心に棲む鬼を、乱世が引きずり出して巷を歩かせるのだ」

軒先の櫓の木に止まって鳴いていた蟬の聲がやみ、しんとしたひとときが夫婦の上に流れた。

「そればかりではない。鎌倉殿を見よ」

実秀はことばを継ぐと、声をひそめて言った。「大きい声では言えぬが、先の合戦では勲功あつた御舎弟を、二人とも殺してしまわれた」

「まこと、そうでございましたなあ」夫につれて佐代も声を落として言った。

「疑心よ。身内さえ信じられぬ疑心がそうさせるのよ。義経殿も範頼殿も、二心なきことをみ仏に誓う誓紙を、鎌倉殿に出されたというがのう」

実秀は蟬がふたたび鳴きはじめた庭に目を向けた。

平泉の義経征伐に、彼は比企能員の軍に組み入れられて出羽に下っている。それもこれも鎌倉殿の御為とはいえ、そのわずか数年前には、彼は同じ白旗をひるがえして義経の軍勢に加わり、平家と戦ったのであった。

どこか空しいものが心に吹きぬけるような軍旅であった、と彼は思う。鎌倉殿の命令のままに、きのうの御大将義経を、今日は敵と心得て戦うのだ。

「佐代」と実秀は言った。「先程、そなたは心が憎しみて占められ、み仏に縋って念仏する心が湧かぬと申したが」

「はい。お許しくださいませ」

「法然さまはのう、幼ないとき、やはり一族の者から夜討ちをかけられ、父上を殺されたお方よ。九歳であられたという」

「まあ」

「父上は息を引きとられるとき、決して復讐を考へてはならぬ、それよりも、一刻も早く出家して、父の菩提を弔えと法然さまに遺言されたそうだ。法然さまはそのあとすぐに仏

門に入られたというが、天台のお山に入るとき、父の遺言忘れがたく、出離の道を生きるために参りました、と言われたという」

「……」

「のう、佐代、そなたの苦しみはよう分かった。無理もないことよ。だが、憎しみからは、自分が苦しむだけで何も生まれはせぬ。佐代がそのようであるのは、俊綱殿の本望ではあるまい。桐生六郎が誅されて、それで俊綱殿が生き返ったわけではもとよりないが、ともかく六郎はすでに罰されて死んだのだ」

いつしか佐代は、涙が頬を伝わるにまかせ、声をたてずに泣いていた。

「時代の苦よ。そなたの苦しみは乱世の苦なのだ。そして此度の合戦では、そなた一人ではなく多くの人間が愛する者たちを失ったのだ。天台の学僧であった法然さまが、念仏の教えをわれらに伝えてくださることになったのも、家族を殺され、家を失い、生きてゆく道を絶たれた人間の、嘆き、苦しみ、泣きさわぐ姿に、深く苦しまれたからだ」と聞いてい

る。京の町は戦乱の巷となつたからのう」

実秀はことばを切つた。彼のまぶたに東山の住房で、多くの弟子や群がり寄る男女の間に立つた法然の姿が、はつきりと浮かんで来た。

「そういうお方なのだ、法然さまは。わしも在京の折には、何度かその法筵を聴聞したことがある。聖者よ。まこと聖者よ。この御方の教えを生きる以外、乱世末法の世に大胡の家の道はないのだ」

七

この日、佐代の心に明りが灯されたのであった。

父を非業のうちに殺され、かつては上野下野^{こうぜけしも}両国の武士団を糾合した足利家が、滅亡させられた恨みは消えぬ。だが、と夫は言うのであった。

それは業深き人間のなす悪業なのである。

佐代の苦しみは佐代一人のものではなく、末法乱世の時代の苦しみなのだ。われらが帰依

する法然さまも、幼くして父を殺され、佐代の苦しみを苦しむことで、心の夜明けに遭遇されたお方である、と。

佐代はそれまでにもまして考える女になつていった。

それまでは、生家を襲つた悲運への恨みに閉ざされ、過去に向かつて佐代の心は閉ざされていた。

しかし今、生家の悲運にがんじがらめにされていた彼女の思念は、少しずつではあれ、その袋小路をはなれて、より広く人間の業というものを見つめるようになって来たのである。父俊綱と兄忠綱を襲い、そして足利家を襲つた悲劇を、平家の人々をはじめ乱世で同じような悲劇に見舞われた人々の間に置いて見つめ、考える女になっていた。

建久七年の秋、ふたたび京都在番^{おおご}になって上洛した実秀は、翌年の暮、無事大胡に戻つてくると、佐代に言つた。

「佐代、わしには一つ心残りがあつたぞ」

「何でございます」



「京都在番中、朋輩がわしに言うたのだ。そう念仏ばかりに精を傾けず、時には法華経を称えることが一層よからうに、とな。法然さまも、元はといえば天台法華の学僧であつたというではないか、おぬしのごとく、天台法華も知らずして、何が念仏かと笑うのだ」

「まあ」

「それのみではない。朋輩がいうには、まこととは法華経を称えるべきところ、このわしに学問がないばかりに、止むなく法然さまも、実秀には念仏を勧めたのだとな」

彼の顔に苦しげな表情が浮かんだ。

「いかにも、われらの頭にお念仏はわかりやすいが法華経はむずかしい。してみれば、やはり法然さまも、わしの無学をみてとつて、お念仏ばかりを勧められたのか」

言葉を切ると、彼は低く、胸の思いを吐き出すようにして言った。

「わしは自分が情けないのだ。若年より戦さに明け暮れて来た自分が、今度という今度は情けなくなつたぞ。だが坂東武者はみな、京

の公家衆のような学問なぞせずして生きて来たのだ」

のう、そうではないか、と彼は妻の同意を求めするように、強い視線で佐代の眸をみつめた。

「何を仰せられます」

結婚後はじめて見せた、取り乱したともいいたい夫の様子であつた。夫は今、お念仏ひとすじに縋つて来たこの家の暮らしに疑念を抱きはじめ、坂東武者の誇りを傷つけられて苦しんでいるのだ。これを直感した佐代は、はじめて口を開くと、しっかりした語調で実秀に言った。

「法然さまが、あなたの日頃仰せの通りの方であるならば、どうしてもそんなことがあります。まあ、あなたは法然さまのお教えよりも、御朋輩の言葉をお信じになつたのでございませうか」

「いや、そういうわけではないが」

いくらか落着きを取り戻して実秀は答えた。ただ、彼らの言うことも成程と思うてな。

そこで京にいる間は、法華經を借りて読誦してもおったのよ」

「まあ。それではもうお念仏をお止めになったのでございますか」

「いやいや、止めはせぬ。ただ、お念仏のあいまには法華經を称えておった」

「法然さまは何と仰せになりました」

「いや、此度の在番は忙しうて、お教えをうける暇がなかったのだ。それに」

と実秀は口ごもった。

「わしの気持ちはそなたにこそ話せたのだ。

法然さまにはいかにも申し上げにくい。で、

在京のご挨拶ばかりをして、帰郷してしまつたのよ」

それが今になつては、やはり心残りでならぬ、という夫に佐代は言った。

「情けないことを仰せられます。あなたらしくもないことではありませんか。お念仏は大胡の家の柱だ、と常日頃仰せになつてゐるのはあなたでございませう。そのあなたが、そのように大切なことを、しっかりと承ることも

なさらず、心残りのままにして帰つて来られたとは、この家の柱もゆるぎましよう。坂東武者の名折れでもございます」

「まことそなたの言う通りよ」

心残りというだけではすまされぬ、強い後悔の心が実秀の胸一杯に広がっていた。

「あなた」

佐代は夫に向かって居ずまいを改めると、両手をついて言った。

「京にお使者を遣わされて、法然さまにお手紙をお書き下さいませ。私も道を知りたいのです。人が生きるまことの道を知りとうございませう。まことお念仏ひとすじが生きる道なのか。それとも、法華經にも綴るべきか。わたくしは、法然さま御自身がいかにしておられるか知りたいのです。あなたのもとに嫁いで六年。わたくしに道を求める心を、あなたや父上が教えて下さつたのでございます」

(つづく)

御法語に聴く

タダカマヘテオナジ仏ノクニニマイリ
アヒテ、蓮^{はぢす}ノウエニテコノヨノイブセサ
オモ晴^はルケ、トモニ過去^{けどう}ノ因縁オモカタ
リ、タガヒニ未来^{かへす}ノ化導^{せん}オモタスケムコ
トコソ、返^{かへす}返^{かへす}モ詮^{せん}ニテ候ベキ。

『正如房へつかはす御文』

私もあなたも同じ阿弥陀さまの極楽浄土へ往生してそこで出会うのだということをよくよく心得て、蓮の台でこの娑婆世界での憂いを晴らし、それまでの因縁について語り合い、また娑婆世界に還つて共に助け合い、人々を教え導くことが第一なのです。

私とあなたくいつまでもく

三月。卒業、別れの季節です。これまでお世話になった方々と離ればなれになるのは何とも言えず寂しいものです。別れの中でもっともつらい別れ、それはまぎれもなく「死」による別れでしょう。現代社会、特に日本では、マスメディアなどを通じて数え切れないほどの「死」を見せつけられますが、それらの「死」は「三人称の死」にはかなりません。しかしながら私たちは、自分にとって大切な人である「一人称の死」に遭遇します。もちろん、自分自身の「一人称の死」をも、この身をもって否応なしに体験せねばならないお互いなのです。

宗教学者であり自身の死を間近にした岸本英夫博士は次のように述べられています。

死の問題をつきつめて考えていって、それが「この、今、意識している自分」が消滅することを意味するのだと気がついた時に、人間は愕然とする。これは恐ろしい。何よりも恐ろしい

ことである。身の毛がよだつほどおそろしい。

（『死を見つめる心』）

いかがでしょうか。私たちにとって、たとえなんらかの形で生まれ変わったとしても、「これまでの自分という意識」が消滅するということが、そして、「私とあなたという関係」が断絶するということは、到底受け入れ難いことでありましょう。

冒頭の法然上人のお言葉は、そうした消滅や断絶を受け入れ難いありのままの人間存在をしつかりと見据えられ、阿弥陀さまのお浄土での「私とあなた」の再会を説いているのです。お浄土での再会こそは、「私とあなたという関係」、自分を取り巻く大切な方との関係の継続であり、それは「これまでの自分という意識」の連続に他なりません。

もちろん法然上人の教えこそは、まさに大乘仏教の思想であり、お浄土での再会にとどまらずに、お浄土から再びこの「娑婆世界に

還って共々に助け合い、人々を教え導くことが第一義であります。けれども法然上人は、やはりありのままの人間存在に目をやり、この娑婆世界に還る時には、「父母師長（ぶもしちよう）の生所（しょうしょ）をたづね（『往生浄土用心』）、そうした「結縁の人（『御消息』）」もお浄土へお迎えすることを私たちにすすめ、「この世に残る者との関係」をも忘れず説いて下さっているのです。私たちの心の中のいかんともし難いありさまを推し量られた、なんとありがたい法然上人のみ教えでありましょうか。

読み人知らずの次のような歌が伝えられています。

先立^{さきだ}たば 遅^{おそ}るる人を 待ちやせん

蓮^{はな}の台^{うてな}の 半^{なか}ば残して 合掌。

（浄土宗総合研究所研究員・林田康順）

大室了皓師が答える

読者からの仏教相談

お仏壇を購入するとき
注意することは？



いつも楽しく読まさせてもらっています。

突然ですが、この「浄土」で相談コーナーを見たので相談させていただきたくお願い申し上げます。

昨年暮れ、何を思ったのか、義父が突然仏壇を購入しようと言いだしました。

わが家は義父と義母、そしてわたしたち家族の親子四人みな元気で、おばあちゃんなど「縁起の悪いこと言わないでよ」と怒っています。

しかし、おじいちゃんは、何がなんでも仏壇を買って安心をしたいと言い張り、このお正月は義父、義母、主人と私が何度も何度も話し合って、大変なさわぎでした。

そして、その話し合いの結果、おじいちゃんの気持ちを大切に、おばあちゃんをなだめ、仏壇を購入することに決めました。

わが家は浄土宗ですが、仏壇を購入する上の注意や、また、家の中のどこに置いたらいいのか等教えていただきたいと思っています。

三十五歳・主婦



次男や三男になると、

一、長男の家には先祖代々を祀る仏壇がある。

二、本家から独立した自分の家には特に仏壇を置く必要はない。お盆には故郷へ帰って、その仏壇にお参りすることになっているからご先祖もそれで喜んで下さる筈だ。

三、本家から独立した父や母が亡くなった時に、仏壇を用意してご供養すればよい。

今の家には亡くなった人がいない供養する対象がないのに仏壇を設けることは不自然だ。

四、亡くなった人がまだいないのに仏壇など買ったら、八十近くなっても元気でいる両親が、急に病気にでもなつて不幸な事になるかもしれない。みんな元気なのだから、そんな縁起の悪いことはしない方がよい。

というようなことから、仏壇の無い家が沢山ありますが、そういう家では、お子様方の宗教教育をどのようにされているのか疑問に

なります。

日本の憲法では、公立学校での宗教教育を禁じておりますので、宗教関係の学校に入らない限り、大学を出ても宗教に関しては無知な人達が少なくありません。

従つて、世間を騒がせている「オウム真理教」のようなものに、宗教の素養のない多くの青年たちが巻き込まれ、家庭の平穏が崩れていった事を数多く耳にします。

もし彼らがそれなりの宗教教育を受けていたなら、このような悲しい事は起こらなかった筈です。

家庭での宗教教育の必要なことを強く感じます。

とてもわが家では出来ない、と言う方が少なくないと思いますが、私は難しいことを望んでいるわけではありません。

仏様やご先祖の方に手を合わせる事が自然に出来て、それが生活習慣の中に溶け込んでいくだけでも十分だと思います。

それが出来れば、

一、生きている人間以上の尊いもの（仏・ご先祖）がある。

二、その尊いものに守られて生きている。

三、そして何時でも私達を見ておられる。だから人が見ていなくとも、清く正しい行いをしなければいけない。

四、次第に、守って頂いていることに感謝の心を持ち、人ばかりでなく動物や植物に対しても優しい態度で接するようになる。

そのためには、家の中に仏壇を設けて、手を合わせ拝む習慣をつけることが大切なこととなります。

何も拝むものが無い家では、その習慣を育てる事は容易ではありません。

ですから、家の中に拝める尊いもの、つまり仏壇を置かれることをお勧め致します。

可愛いお子様方を立派にお育てになることを願っておられる筈です。

そのためにも、仏壇をお求めになる決意をされたことに敬意を抱きます。

お求めになるには、専門店でご相談になれば親切に教えてくれますが、家のどこに置くのか予めお決めになり、大きさなど考えてからお店にお出かけ下さい。

また置かれる所は、方角をよく考えなさい、どうるさく言う人がいますが、それは一切関係ありません。

仏壇は尊いものですから、それに相應しく、拝み易い所に置かれたら良いのです。

床に置く余裕のない家では、棚や家具の上などを選ばれる家も少なくありません。

宗教的な素養は、人間形成のために極めて大切であることを申し上げて、あなたのご質問に対するお答を結びます。

続

午後の日差しの中で

ケータイは チョベリバは 吉川英明



「チョベリバって何のことだか知ってるかい？」

初めて訊かれた時は、まったく見当もつかなかった。

「チョベリバ？」

「うん、じゃチョベリブは？」

これも知らなかった。

今はもう、新聞や週刊誌に取り上げられて、大分知られるようになったようだが、まだご存じない方のために説明すると、チョベリバは、チョー・ベリー・バッドの略、つまり最悪だということ。この反対がチョベリグ、チョーベリーグッド。チョベリブはチョー・ベリー・ブルー、どうしようもなく落ち込んでいるという意味である。

いずれも、今の女子高校生が使っている言葉なのだが、『現代用語の基礎知識』を覗いてみると、他にも、チョムカ、イタベル、ピタT、ロンブーなど、見当もつかない言葉が山ほどある。

ついでだから、解説を引用すると、それぞ

れ、チョーむかつく、いたずらでかかっていたポケットベル、体にびったりしたTシャツ、ロングブーツの略だという。

聞いてしまえば他愛もなく、なるほどと納得出来るものばかりなのだが、援助交際だ売春だと、最近の女子高生の実態を聞くたびに目を剥いている我々には、何やら、やくざの隠語か符牒めいて、不愉快なものに聞こえるのだ。

といっても今回は、電車の中で物を食べるとか、盛り場の地面に座り込むとか、人目につく所で、制服から私服に着替えるとか、この頃、色々なメディアでも批判されている彼女らに、怒りの筆鋒を向けようというのではない。チョベリバのインパクトがあまり強烈だったので、日本語の略語について、ちよつと考えてみたくなったのである。

こういうわけの分からない新語を聞くと大人達は、若者の言葉が最近益々滅茶苦茶で出鱈目になってきたと、笑ったり嘆いたりする。先に書いたとおり、私の反応も最初そうだ

った。だが考えてみて、ちよつと待てよという気になった。

身の回りを振り返ってみると、我々が普段使っている言葉の中にも、出鱈目、減茶苦茶な略語が氾濫している。日常の言葉にこれほど略語が多く使われている言葉というのは、世界でも珍しいのではなからうか。

そして、そもそも日本語の略語というのが、言葉の構造も意味も無視した思い付きのような作りなのだ。よく言えば恣意的、悪く言えば、いい加減で出鱈目なのだ。

国連とか経団連とか農協とか、長い漢字を略す場合はそこにルールのようなものがあつてまだいい。減茶苦茶なのは、ちよつと長めの普通名詞や外来語の略語の場合だ。

昔、就職して最初に大阪に赴任した時、喫茶店でアイスコーヒーを注文したら、ウェイトレスが、カウンターを振り向いて、いきなり、
「レイコー、ひとつ」

と怒鳴ったのには驚いた。

レイコー、つまり冷たいコーヒーの略である。冷たいコーヒーなら自然だが、冷麺ではあるまいし、冷コーヒーとは大阪でも普通言わない。しかし、それを強引に詰めた上尻尾を切って、レイコーなのだ。

また、大阪府警の記者クラブでのことだったが、先輩記者が近くの食堂に、

「タニンベツ、一つ」

と出前を注文している。それは何ですかと訊いたら、牛肉の卵とじ丼は、親子丼ではなくて他人丼であり、それを具とご飯と別々に盛ったものと教えられた。

東京では聞いたこともなかった。なるほど、他人丼の別盛り、他人別に違いないと感心もしたし、ちよつとしたカルチャーショックを感じたことだった。

話がそれるが、東京と関西の違いで面白かったのは、電子レンジだ。東京では、終了を知らせるあの「チン」という音から、電子レンジで物を再加熱することを、「チンする」という。ところが、何年か前、京都の友人の家



イラスト・平野 稔

に行ったら、食事の時、彼が奥さんに、

「おい、これちよっと冷めとるぞ。ポンしてこい」

と言ったので、思わず吹き出した。

チンとポン……ポンの方が何となく当たりが柔らかい。東京弁と京都弁の違いだろうか。それはともかく、他人井の別盛り、すなわち他人別は字義通りの何となくユーモラスな略語だが、これが発音の苦手な外国語となると、略し方のルールもヘチマもない。好きなように切り刻んで日本語化してしまう。

テレビ、トイレ、ラジカセ、マスコミ、オフレコ、パトカー、パソコン、インフレ、インフラ、リストラ、セクハラ、カーナビ……こうしてみると、日常頻繁に使われる外来語は、略されないで使われているものの方が少ないのではないかとさえ思われる。

その上夥しい造語が毎年加わる。

ロコミ、カラオケ、イタメシ、ヤンママ、朝シャン、コギヤル……新聞や雑誌にも日頃何気なく使われているが、チヨベリバ、チヨ

ベリブに決して劣らない力作ぞろいだ。

しかし、こうした言葉はもはや完全に日本語として定着していて、大方の人々が意味を理解し、日頃違和感なく使っている。

その面白いのは、ロコミだとかカラオケだとかという、減茶苦茶な組み合わせからなる造語ほど、便利な新語だということに気がつく。つまり、ロコミという現象、或いはカラオケという遊びを一口で言い表そうとしても他に言いようがない。これしかないのである。

逆に言えば、一口で表現する言葉がなかったからこそ、適当な言葉を寄せ集めてきて、でっち上げた新語なのだ。

しかし、うまいと思う。ロコミなどはまさに傑作だと思う。それに比べると、朝シャンなどは芸がない。

こうやって並べ立てて見ていると、こういういい加減な略語や造語が、玉石混淆次々に出来上がるのは、日本人の器用さと日本語の特質が一致した結果なのだろうと思えてくる。

この手の言葉は今に始まったことではなく、今では死語になってしまった大正時代の略語や造語にも、滅茶苦茶なのが沢山あるからだ。エノケンの歌で有名な「モボ」や「モガ」などが典型的な例だろう。これが、モダンボーイ、モダンガールの略だというのだから乱暴な話である。

古い略語、造語では他にも、円タク、輪タク、ガリ版、バンカラ、コールドなど、珍妙な言葉には事欠かない。驚いたのは、キセルの胴の部分のラオである。以前、何故ラオというのかと思って調べたら、なんと、ラオス産の細い竹を使ったからだと書いてあった。

自国語の純血を保つことに厳しいフランス人が聞いたら腰を抜かしそうな言葉ばかりなのだ。

ことほど左様に、元を調べると何とも珍奇なのだが、これらの言葉は、それぞれの時代にしっかりと定着しながら、今はその対象となる物自体がなくなってしまうために、その使命を終えて死語となったのである。

チョベリバやチョベリブが、このまま広く定着するとは思わないが、日本語の場合、何となく自然発生的に生れてきた略語や造語は、当初は違和感や嫌悪感があっても、はっと気がついた時には、自分でも日常会話に使っている……そんなしぶとい浸透力を持っているのだと思う。

ところが最近、こればかりはどうしても嫌だという略語が出てきた。

「ケータイ」である。これが携帯電話のことだという。

いつのころからか、周囲の会話で、携帯電話が「ケータイ、ケータイ」と言われ始めたのに気がついて嫌な予感を感じていた。

面と向かって使われると、持ち前の曲がつた臍がなお曲がりだして、

「ケータイ？ 何だそりやあ……携帯って言ったって色々あるぞ。携帯便器か？」

などと毒づいていたのだが、ある日、NTTの新聞の一面広告で「ケータイ」というカタカナが大きな顔をしているのを見つけて天

を仰いだ。ついに「ケータイ」という呼び名が市民権を得てしまった。

いい加減だとか出鱈目だとか言いながら、他の略語や造語は平気で使っているくせに、どうして「ケータイ」がそんなに嫌なんだ、別にどうだっていいじゃないかと言われそうだがそうではない。どうしても、ちよつと引っ掛かる。

漢字熟語を略す場合、それぞれの単語の頭文字を取るのが普通なのに、この場合は、上の単語だけで下を切り捨てている……電話という言葉を見捨てている。

携帯という単語はそれだけで意味があるから、その下に他の言葉をつければどんな物にも応用出来る。根無し草のような感じで、言葉として「決まり」が悪いのだ。

どうしてケータイになったのだろうか。ケーデンでは、警察電話を連想するし、漢字で携電ではちよつと固い。他に略しようがなかったのだろう。

だったら、携帯電話とフルネームで呼んで

欲しい。そんなに長くはないし、言い難くもない。

現に公衆電話はコウデンともコウシュウとも略されないで使われている。これこそコウシュウでは公衆便所と区別がつかない。この公衆便所の他にも、横断歩道、懐中電灯など、そのまま使われている四字の熟語は少なくな

い。

ケータイという略語はチョベリバだ。そうは言っても、私の嘆きをよそにケータイはその本体以上の勢いで広く定着するだろう。しかし、私自身はこのままずっと、そう言わない、そう書かないでいこうと思っている。

(了)

「がたびし」というこの言葉、普通はカタカナで書いて、立て付けの悪い建具などがきしむときだす音「擬音語」とお思いでしょうし、ましてや漢字で書いて仏教の言葉などといいますが、驚かれる方も多いと思いますが、もう一つ、「身体にもガタが来た」「組織も何もかももうガタガタだよ」の「ガタガタ」（我他我他）と合わせて、まぎれもない仏教語です。

「我他彼比」も「我他我他」も、自分と他人、あれとこれ、

とものごとを相対化し、対立していることをいいます。そうすると、そこから様々な衝突や摩擦が生じ、物ごとに円滑を欠く状態になるので、「我他彼比」と呼んだのです。

私は私、お前はお前と、勝手気ままに相手のことを考えない行動をとったら、けんかになるのはあたりまえです。仏教の最も基本的な教えは、この世のすべての存在やできごとは、お互いに相依り相助けあつて成りたっていると言っています。

我他彼比

がたびし

私達はあまりに自分自身の先入観、偏見、独断と共に、自身、自分の考え（我見）にとらわれてしまっているのではないのでしょうか。おれがわれがの考えでいれば、人間関係「我他彼比」くるのは当然でしょう。我と他が、自己のつとめを守り、相手を尊重すると「我他彼比」はないと言っています。「仏道をならふといふは、自己をならふなり、自己をならふは、自己を忘るるなり」

「正法眼蔵」

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

☎六一五 京都市右京区

西京極郡町一〇三番地三

(株) 島津法衣佛具店

☎〇七五―三一四―七七六八

FAX 〇七五―三一五―三七五三

うまい野菜と



料理の話⑤

あるいは

セ
ッ
ッ
エ
ー
バ
タ
ケ

自家菜園の

ひそかな

愉しみ

我田大

昨年の一二月の半ばのこと。もう何にも外仕事がなくなった、のに小春日和というか天気がいいし、初雪もアラカタ消えてしまったので、手持ちぶさたというか、気持ちのいい外でぶらぶらしているのもコシトメ（二十人目）がわるいというか……。で、思いついて来春の畑用のシバを伐りに行くことにした。いつも出遅れて、若葉の出たシバを立て、これまたコシトメのわるいことをしている私だからです。

えーと、ツルの出る野菜にはシバが必要なのはわかりますよね。シバをしないと収穫しにくいし畑の面積が多く必要だからです。果実に土がついたり、見つけにくかったりもします。シバを立てるのがめんどくさいからと、インゲンはツルナシ種に、キュウリは地這い式にする人もいますが、私の場合、食味優先主義と畑が狭いことにより、けっこうシバが多くなっているのです。

そのシバですが、私は胡瓜とサヤインゲンは鉄パイプにポリエチレンのネット式で、エ

ンドウと長芋と隠元豆、苦瓜、食用糸瓜、隼人瓜は伝統的なシバキによるシバにしているのです。

胡瓜とサヤインゲンはトンネルの中を自由に歩いてもげるので近代的なパイプ式が都合がいい。毎年シバキ伐りに行かなくていいのもいい。ネットも安くていい。ただ（勧められてはいないが）ネットを次の年も再利用しようと思うと大変だ。ネットを切らないように、好きホーダイからみあったツルをはずすのが、イヤ。辛気くさいというか、根気がいるというか。ウルノギ（間引き）の次くらいにいやな仕事だ。また外す時からそのつもりで、ネットをきちんとしまっておかないと、来年、いざ使おうという時ミンダラケテ（もつれて）すごくイライラする。「する」なんて何気なく書きましたがホントにやんになります。した人はわかります。再利用しない時でもちやんと焼却処分しないでそこらにホンなげておくと、いつまでも腐らないから耕耘機こううんきの刃にからまったりしていやです。腐らないとい

う人間にとっては都合のいい長所も困ったものです。

最初にこのネットを張らされた時は大変だった。セツツエー畑前任者の母は、人がしているからいいものだろうというのでノーキョーに言っただけで（ろくに）使用法とかコツの説明も聞かずにパイプとネットを買ってきてテメガッテ（手前勝手）なやり方で使っていたのだ。その言うことをきいてやったら、ものすごく手間がかかる。ここにその詳細を述べるに長くなるので省略しますが、せっかくの合理化の価値がないやり方だった。あーでもないこーでもない時間ばかりかかってイライラした。合理的に作ってあるパイプ・ネットのはずだからと、モノの作りから考えなおしてみればナンテコタナイ。上下に紐を張りその間にカーテン式にネットを張ればいいのだった。野菜の列がネットの長さより短くても、ぐるっと回さずに片側ずつカーテン式をやればよいのだった。またそれを妨害するような工作物は支柱に取りつけない、とこ

れていいのだった。そうするとアツという間にシバができた。

ダンドリというか構想というかがちゃんとできているかいないかで仕事スピードがどんなに違うかという、例のふつうのハナシだった。でも説明書なしで実物を与えられそこから逆算（？）して、正しいであろうやり方にたどりつくのは楽しいといえれば楽しい経験でした。

えーと、道草をしました。このネット式に対する伝統のシバキ式のシバは伐ってくるのはちよつと大変だけれと、合掌式に立てるのはたいしたことではありません。シバキの根元の端は鉋でとがらせておく。隣合った二ウネの地面につきさし立てる。その交差したところに両側からシバや竹などをあてて縄でしばればいい。木の弾力でけっこうしっかりした構造物になります。お金がいらぬのもいい。鉄やプラスチックにからみつくのと違い、植物の蔓も木にからみつくのはうれしがっているようにいい。そして、片付けるのがカン

タンなのはすごくいい。蔓を力まかせにひっぱってとり、しばった縄を外し、シバギは土から抜いて束ねれば終わり。蔓や枝は腐れば肥料だし、シバギは燃やせば灰になり、これも肥料。ワラ縄のワラも自然に腐る。

この物が腐るといふかしぜんに消えていくのは畑にあっては気持ちがいいことです。これにたいし畑に落ちているポリシートの切れ端やビニールひもなど、ずっと腐らないプラスチック類はもう気持ちが悪いです。拾って捨てないと毎年土をうなうたびにまたお目にかかれてイヤです。それを燃やしても変な臭いでいやなのはご存じのとおりです。

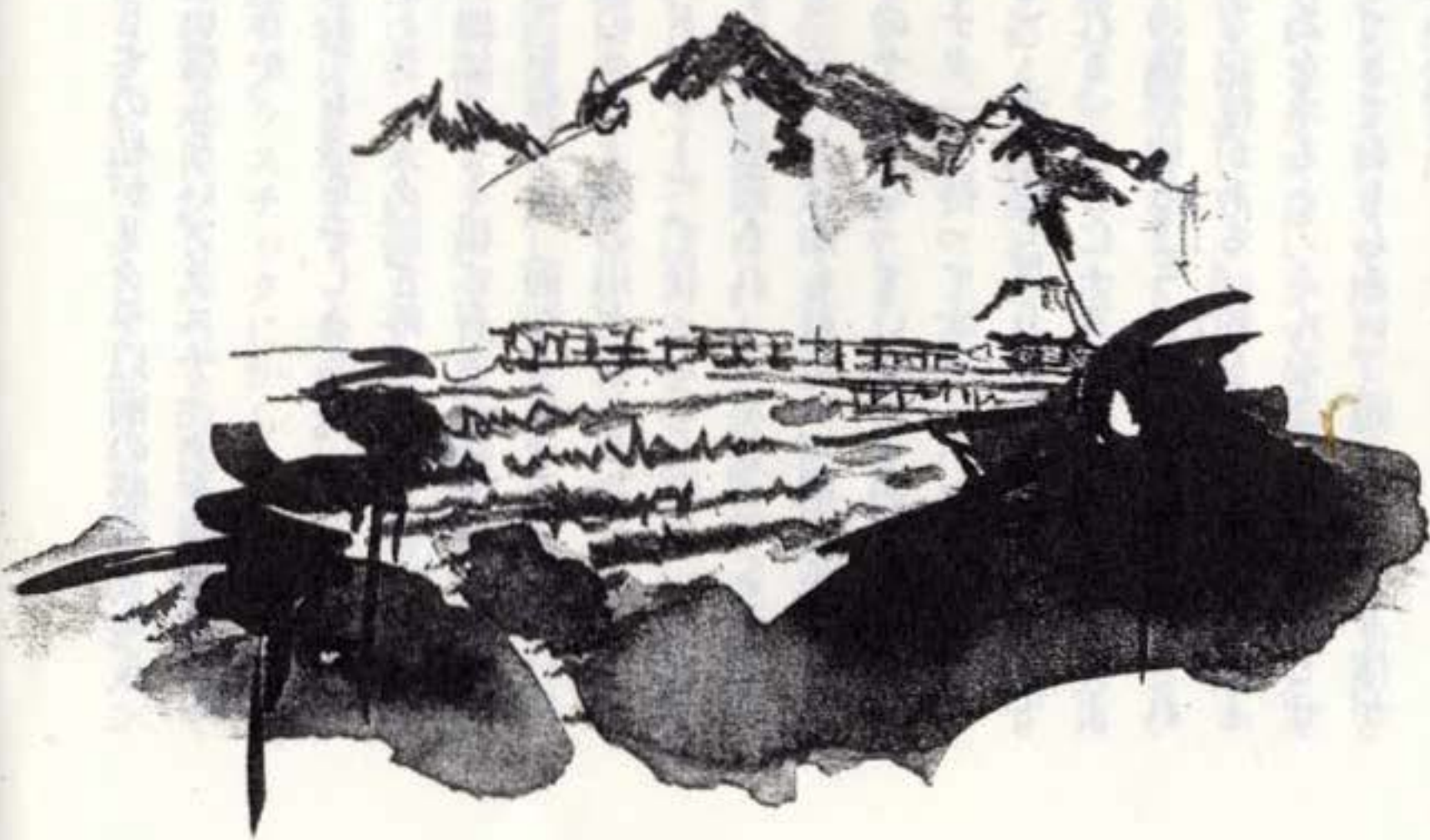
体や衣服に土がつくと「汚い」とか言いますが、その汚いはずの土にあると、プラスチックが汚い感じがするのは不思議です。腐らないからでしょうか。ふつう腐った物は比喻的にさえも好い感じをもたれないのに、土にあると、腐らないのがかえって汚く感じるのはどうしてでしょうか。えらそうにしていますが人間も死んで消滅する存在で、その死ぬ

生物としての私がリクツ以前の感覚として、死なない腐らないプラスチックを嫌悪するのでしょうか。

またしても道草をしました。シバギキリです。軽トラ（ツク）でめずらしく雪のない林道（当地はスキー場で有名な新潟県の石打。豪雪地）を登った。前から目をつけておいた道の脇のスキー場の旧ゲレンデに行った。昔ブル（ドーザー）でひっかいた跡地、それが手入れなしに放置され、カヤとゴカン（タニウツギ）と、名は知らぬがシバ用に手頃な木ばかりのヤブになっている。そのちょうど手頃のをナタ一丁持って次々にハタツキル（叩き切る）。木を少し反らせて切るとスパツとよく切れる。自分にナタが向かってこないように体の脇で切るようにするのは昔注意されたような記憶がある。鉈なたを持って木を切るという行為をすると、そんなことがフツとしぜんにできておもしろい。頭というより体が覚えていた。

伐ったのは下の林道に投げ下ろします。そ

あさき
あさき
あさき



して今度はこれをしばる。伝統的にはネジツキという粘りの強い木でしばります。標準名マンサクのなかまらしいです。

昔は熱源は、石油やガスの前はシバキヤコロ（薪の太いの、割ったの）だった。ムラの各家は共有林シバキヤマをくじ引きで分けて、一年分の燃料を確保した。同じ場所は三〇年に一回くらいに伐ることになっていたらしい。このシバキキリは重要な作業だった。でも今はそんなことをする人はいませんから、かつてのシバキヤマは木が太り放題です。

と、言っている私はじつはこのシバキキリをしたことのない世代です。ですからネジツキでシバキをしばるのもあまりうまくないのです。でもネジツキでしばるとシバキがビシッの一つにまとまって扱いやすいくらいは知っています。そのネジツキがなかったので残念ながらビニールひもでしばってきました。五把ほどです。で、もうこれで一つ春の準備ができてうれしい気分になりました。なんせ、いつもは種を蒔いて芽を出した植物にせかさ

れてシバを伐りに行っているものですから。あとシバキを伐りながら、シバとかシバキはなんでそういうのかと思いました。野菜のシバにするからシバ木なのか。シバキを立てる（とシバギという）からシバというのか。音の同じ草のシバ（芝）と関係はあるのか、とか。そういえば刺されるといつまでもちくちく痛いシバムシ（イラガの幼虫、毛虫）というのもいた。と、そんなことを思いながら、葉が全部落ちた、シバキヤマ雑木林を見ると、冬の低い日をうけて白く光る枝はその集合体は、スケールはちがうが芝生みたいに見えた。そこを転がればちくちく痛そうでもある。こんな感じがシバということばのもとなのかなと、自分だけで考えました。

俳句の未知へ

大畑 等

鮫鯨の骨まで凍ててぶちきらる 楸邨

加藤楸邨しゅうせんの代表句の一つであるこの句に、私は現代性を感じる。ただ新しいと言うのではなく、ものが暴力的に露出してくる現代に、鋭敏に反応しているからだ。この句にも感じる諧謔味かいぎやくみは鮫鯨あぐろの容姿そのものに備わっているのだが、この句の特徴をきわだたせるために他の俳人の句を掲げてみる。

鮫鯨の口ばかりなり流しもと 虚子

鮫鯨を煮るにも痩せて書淫の手 桂郎

鮫鯨に似て口開く無為の日々 夕爾

それぞれにそれぞれの情緒が表れていて、それが鮫鯨の容姿とぴったりに合っていて、いわゆる俳句らしい。一方楸邨の句は、目の前の鮫鯨の状態が俳句のリズムにのせて畳み掛けてくる。情緒を交えることができぬほど、暴力的に露出するのである。

たった一発の爆弾で都市が壊滅する。それは人間が作ったものではあるが、その原理は夜天の星々の光の源泉でもあるのだ。「もの」の力は伏せられていたに過ぎない。堰が切られて、「もの」の力が私達の日常に押し寄せてくる。楸邨のこの句は昭和二十四年に刊行された句集『起伏』に載っている。広島、長崎に原子爆弾が投下されて、戦争が終わる。その生々しさは、作者の心中にあったとしても、この句から戦争の悲惨さを読みとろうとするのでは決してない。「もの」が大いなる力をもって、私達の現前に出てきている、そういう状況のなかに私達は、俳句は、さらされていくのだ、と感じてしまうのである。

「花鳥諷詠」という美意識に俳句を閉じこめなければ、俳句は未知なる領域に放り出される。人工物も含めた「もの」の世界は多様で、混沌としている。しかしもはや俳句の表現領域を限定することはできない。そのようなことを、この俳句から実感するのである。

楸邨は「人間探求派」と呼ばれているが、実作の立場から言えば、とらわれることはないであろう。「もの」から逃げない、「ことば」から逃げない。それだけのことではないのだろうか。

元旦の機織車とまり大きな黒 楸邨

貨車押して片目は枯野見つつあり //

こがらしやしかとくひあう連結器 //

これらの句に見られる心情は自然との幸福な関係を表現してはいない。むしろ社会的な不安であり、冷たさであり、複雑さである。花鳥に目を留めるのも人間なら、貨車に目を留めるのも人間である。「もの」、「ことば」と向き合っていないければ、このような句は出てこないのである。向き合っていればこそ次のような句も出てくる。

青蚊帳に父の潜水艦がいる 京子

先輩の菊池京子さんが平成六年に第二十五回原爆忌俳句東京大会で東京都知事賞を授賞した。私は何の大会での授賞作かも知らず、この句を耳にした。即座にこの句に現代を感じた。「青蚊帳」と「父」と「潜水艦」の強烈な三語を俳句の十七文字に収めることは、通常ほとんど困難なことなのに（主題が分散して、核心に届かないから）、ここではしっかりと、訴えてくる。きっと俳句のリズムに言葉がのっているからである。意味が分散するのを、俳句のリズムが頑として拒否しているのだ。また非常に幻想的だが、決して浮ついていない。情景は全くの非現実でありながら、現実と同じ強さをこの句はもっている。それは、よけいな感情移入をしていないからだ。したがって、この句は読者それぞれの鑑賞にたえる。私は作者の意図にもかかわらず、この句に生（性）と死とさらに父性という現代人の心の錯綜する心情を感じるのであるが、この句を散文でどのようなにほぐしていった

いのか。実にやつかいな句ではある。

青蚊帳という「私」の領域に死んだ父がやってきた。ここでこの句に「死」と「父性」

が登場する。しかし父と想っていたのは実は、

「私」の心の中に沈んでいた巨大で獰猛な潜水

艦であつて、それは男の「性」であり、ある

時は人間を殺戮する機械でもある。それは自

分の中にあるものでもあり、かつ他者でもあ

る。夢のなかでは、このような転換は不思議

にも容易になされる。この解釈は私の独断で

ある。京子さんの弁によれば、艦砲射撃で重

症を負い、死線をさまよつたが、毎夜青蚊帳

の中に亡父が迎えに来た。しかし履き物が見

つからずに目覚めるといふ日々が続いたとい

うことである。しかし何故潜水艦なのだろう。

精神分析医なら旨く言うだろうが、とにかく

ここで、この句を一気に現代人の心性にまで

触れさせてしまったのは「潜水艦」の出現と

いう不気味さである。

しかし、この句に古代の心性をも感じる。

『日本書紀』崇神天皇紀の話に、姫のところ

に毎夜、通ってくる男性が、夜が明けると居

なくなる。姫がうるわしい姿を一度見たいと

願うと、男は明朝に櫛の宮を開けるように言

う。明朝、言われた通りにすると、そこから

きれいな小さな蛇が現れた。姫は動転して大

声を出して騒ぎたてると、蛇はたちまち美丈

夫の姿に戻り、恥をかかせたと天空を飛んで

御諸山（三輪山）へ還ってしまった。姫は泣

き悲しんで座つたところ、箸で陰を突いて、

死んでしまう。いわゆる箸墓伝説である。こ

の話もやはり、生（性）にそして、死にかか

わるものであり、人間の根源に性があること

を暗示してはいないだろうか。人間を超越す

る力をもった蛇。男性の象徴としての蛇、動

物でありながら祀られる蛇は、古代人の心に

形を変えながら現れる。

京子さんのこの句は、原爆忌俳句にとどま

らずに、根源的なものを訴えてくる。古代的

であり現代的な句なのである。その要は「潜

大畑 等（おおはたひとし）プロフィール

1950年 和歌山県新宮市生。

早稲田大学理工学部建築学科、

同大学院理工学研究所卒業。

現在、一級建築士事務所

大畑建築設計事務所代表取締役として、

住宅、庫裏等の生活空間から

商業施設まで広範囲の設計を行う。

俳人としては

「炎天の卒塔婆倒るるわけにいかず」

（『月天』創刊準備号所収）の

怪句が一部に有名だが、

むしろ知性溢れる奔放な作風が

各界の注目を集めている。

俳句結社「麦」同人。

水艦」のイメージを最大限に活用して句に用いたことにある。この句の「潜水艦」は古代における蛇と同様に多義的である。

私は、楸邨の句と菊池京子さんの句の類似や対比のためにこの稿を起こしたのではない。これらの句を通して、未知の領域に足を踏み入れよ、と自戒したかったからである。

快適な環境を創造する

川 鹿 島

KAJIMA CORPORATION

代表取締役社長 梅 田 貞 夫

本 社 ● 東京都港区元赤坂1丁目2番7号

電話 ● 東京03(3404)3311(代)

よく、「今どきの若いものは……」という言葉が中年以上の人たちから言われる。

いつの時代でも言われていることだ。しかし、若いものがその時代の政治や価値観に反発したり、また、大人からは理解できないようなファッションをしたりすることは、言ってみれば当たり前のことで、逆に、そうした覇気のない若者のいることをこそ、大人は心配しなくてはならないだろう。

しかし、しかしである。

先日、こんな光景を見た。

郊外の道にある無人の野菜販売所で、六十過ぎのいい年の男性が車から降りると、人参とキヤベツを取りあげ、目の前にある料金箱にお金をいれずに車に戻ろうとした。それをそこで見ていた高校生の男の子が、「おじさん、お金忘れているよ」と声をかけた。するとその男性、「うるさい、ばか」となって、車に乗って走り去ってしまった。高校生は啞然とした目で走り去る車を見ていた。

⑦ しろに減加いい

私も自分の目を疑った。今どきの大人って、こんなもんなのか、と。

そういえば、薬害エイズの問題も、官僚のおこした様々な収賄事件も、オレンジ共済の詐欺事件も、いい年をした大人のしたことだ。いやいや、世の多くの犯罪はほとんどがいい年をした大人のしたことだ。

これまで、悪戯っ子を「コラッ」と叱っていたが、これからは、こどもを叱るなんて、とてもできなくなった。

吉野法衣店

各大本山御用達浄土宗袈裟法衣専門



〒160 東京都新宿区南元町17
TEL 03-3355-2168
振替 東京2-176372

「桜が満開となり春爛漫を……」テレビでは、胸躍するような話題と同時に、まだまだ毎日のように雪に見舞われている北の地方のニュース。わが島国・日本の長さをあらためて感じます。さてさて、もうすぐお彼岸。

桜は南から順番でも、このお彼岸は北にも南にも一緒にやってきます。ここにも仏さまの平等のお慈悲が感じられるというものです。お寺での彼岸会法要やおじいちゃん、おばあちゃんのお墓参りにと、予定をたてている方、少なくないでしょう。

今回は「廻向（えこう）」のお話を。ふつう、「廻向」といえば、誰々がお浄土へ往生しますように、お浄土で安らかに過ごされますようにと願って自分の積ん

若和尚の

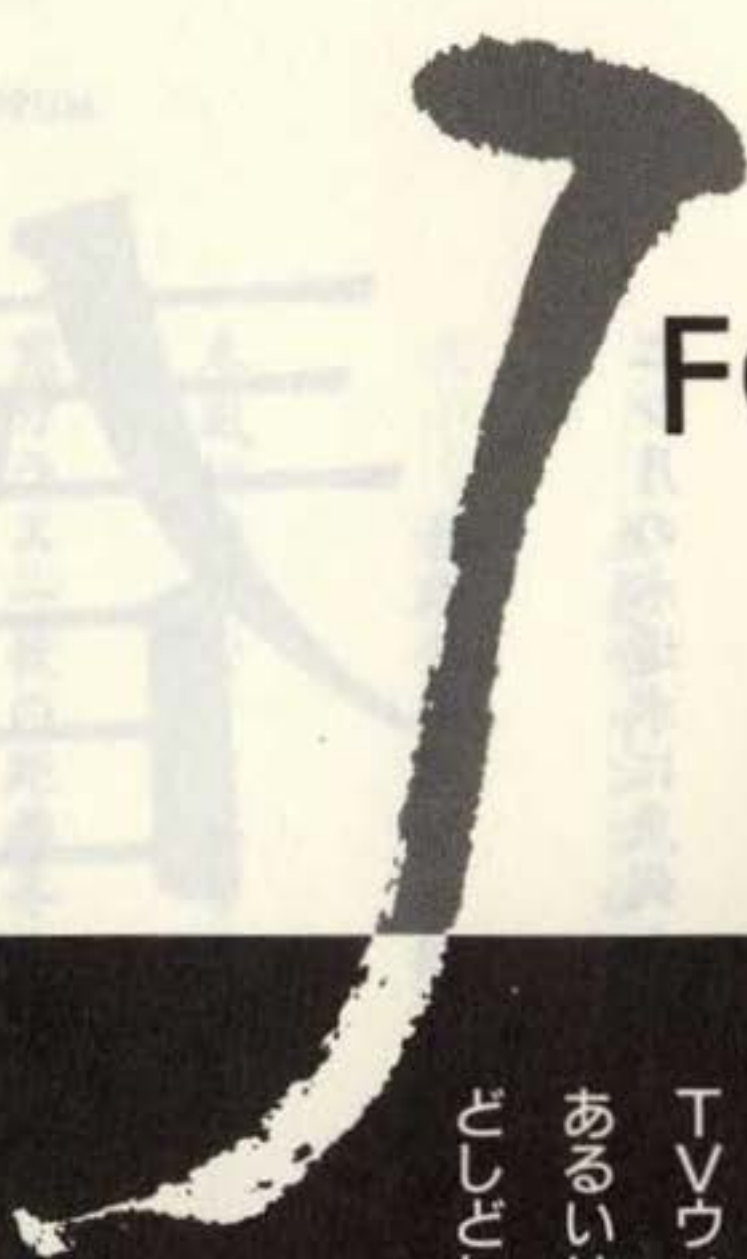
ちヨットいいはなし 其二十三

だ功德を振り向けることを意味します。お寺参りやお墓参りはこれに当たりますね。でももう一つ、忘れてはならない大事な意味が。それは、すでにお浄土に先立たれた方々が、この娑婆世界にいて迷い苦しんでいる私たちのために働きかけて下さる、ということですよ。

「それってどういうこと？」
確かにそれを具体的な現象として感じ取るのは難しいものです。楽しいことがあった時、反対に苦しい時、何かに迷った時、仏さま、御先祖さまの前で掌を合わせてご報告したり、相談を投げかけたり、時には涙をこぼしてみたり。そんな経験、ありませんか。その時のことを思い出してみして下さい。声なき声。

であなたと一緒に喜んだり悲しんだり、励まして下さったりはしませんでしたか。そう、その「声なき声」こそが、もう一つの「廻向」なんです。

でも実は……。そんな時以外にも四六時中、仏さま、ご先祖さまは私たちのためにメッセージを送り続けて下さっているんです。ただ、普段は気づかないでいるだけなんです。せっかくのメッセージをキャッチ出来るか出来ないか、それはあなた自身の「おもい」にかかっています。もっともっと、心の耳をとぎ澄ませてみましょう。ほら、今この瞬間にも、遥か遠いお浄土から、あなたへのメッセージは送られてきているはずですよ。ねっ、聞こえませんか？。（正）



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

春

誌上俳壇

ニン月の水道水に魚飼われ

朝刊に月齡探す水仙花

鬼は外風船パンと割れにけり

おかしくておかしくて雛も乱れ髪

笠井亞子（東京都中野区）

井口しおり（東京都大田区）

鬼やらひ追われし鬼のいきどころ

法然忌ゆつくりと誦す小消息

立春やインコがキスする台所

舌頭千転御行の松に日脚伸ぶ

冬風に煙しなりて昇りけり

窓ガラス一枚の距離冬の蠅

吉田ゆきゑ (東京都江戸川区)

蓮門俳子

井口吾郎 (東京都大田区)

三平堂ちさき座ぶとん落第生

豆腐屋の明日はいかにオープン戦

蟻穴を出て見おぼえのない財布

下宿屋の薄き石鹼春の間

老いたるの一瞬ながき春の土手

ロバの耳捨てきし土手の土筆かな

近藤十四郎（東京都文京区）

蓮門俳子

蓮門俳子

鱈土産提げ来る僧に小犬ジャレ

あかときの禽に日の射す春隣

冬の海沈みいるもの浮かせおり

銀紙の中は上海雪降れり

くちびるは小さく「あ」といひ花椿

囁きつ春風稚児の栗毛梳く

佐藤雅子（山形県上山市）

大畑等（千葉県柏市）

近藤あずさ（三重県鳥羽市）

笠雲の生まるる気配大根引く

どよめきのその瞬間の初日の出

峠路にお在す石仏寒返る

蚕の匂ひ今も残りて梁太し

松本厚子（東京都町田市）

王義之を習ふ座敷の寒牡丹

研ぐ米の光る山茶花日和かな

朝摘みの黒土こぼす春菜かな

春浅し若狭の市の漆箸

内堀綾子（東京都小平市）

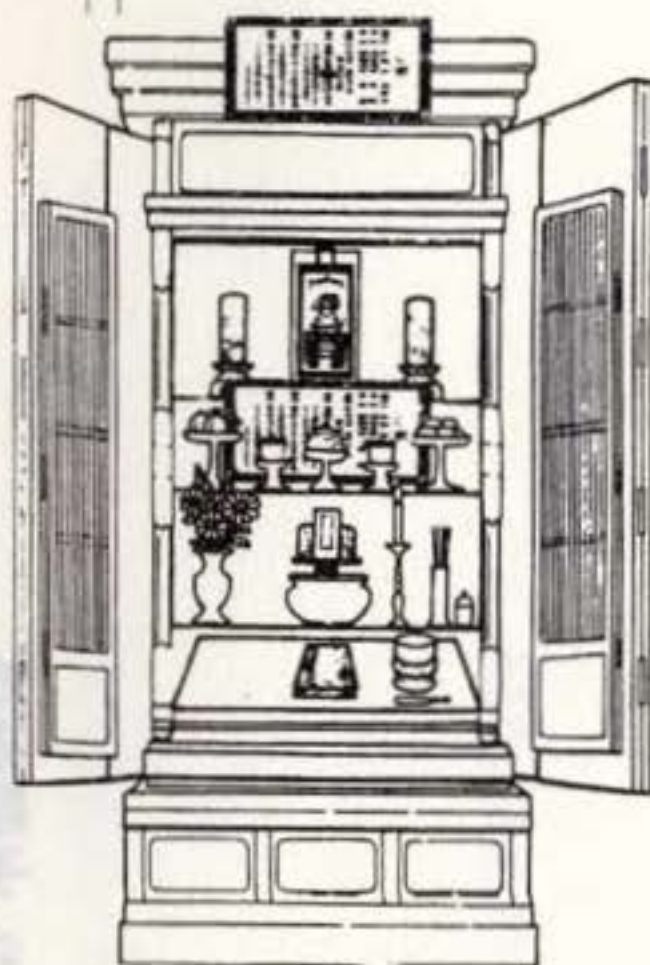
好評
発売中
!!

お寺から檀信徒へ

宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。
菩提寺とその宗旨がいつも
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。



定価：大（32.0×18.3cm）721円／小（27.3×14.2cm）412円

注文・問合せは

法然上人鑽仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036

事務局便り

四月号予告

この四月六日から始まる、信州・長野善光寺の前立ち本尊の御開帳にあわせ、『浄土』四月号では善光寺御開帳特集をいたします。

善光寺如来として有名な、絶対秘仏の一光三尊如来は、古くからわたしたち庶民の信仰を集めてきた仏さまです。その前立ち本尊の御開帳は七年に一度の大事事で、特に本年は、甲斐の善光寺、飯田の元善光寺とそろっての御開帳となります。

善光寺を支えるのは天台宗大勧進と浄土宗大本願。特集では、大本願の御住職・一條智光上人へのインタビュー、全国善光寺会の初代、二代会長による対談、そして甲斐善光寺、飯田元善光寺、さらに長野善光寺に関係の深いお寺の記事と盛り沢山でお届けいたします。

中でも、本年四月で長きにわたってお勤めになられた御住職の任を退かれる一條智光上人には、あたたかな、そしてやさしさにあふれるお話をいただきました。どうぞ、御期待下さい。

また、この御開帳にあわせ、善光寺参拝旅行をご計画の御寺院も多いかと思えます。檀信徒の皆様への記念品として、『浄土』四月号をぜひご活用下さい。

●「宗旨布教額」

発売以来、ご好評をいただいております「宗旨布教額」。「うちのお寺、何宗?」「どんな教えなの?」そんな疑問にお答えするのが、ご家庭のお仏壇に掛けておくこの布教額です。ご寺院の落慶式や帰敬式、受戒会などの記念品としても大変喜ばれております。菩提寺名もお入れしますので、どうぞご利用下さい。パンフレットをお送りいたしますので、事務局までご請求下さい。

●新規会員紹介

購読会員

東京 麴町 大森ヨネ子
山梨 甲府 山田善子
新潟 佐渡 常念寺
山形 鶴岡 生田正昭



ぼた餅を作りし人も墓の中

岱潤

春のお彼岸になると、必ずぼた餅を自分の家で作って持ってきてくれるお檀家さんのおばあちゃんや、数名いらつしやいました。だんだんとお浄土に還ってしまわれ、もうお一人を残すだけになつてしまつた。さみしい限りだ。

市販のものとは違い、それぞれの家庭で作られるぼた餅は、それぞれの味がし、大変おいしかった。しかし、ほとんどの家庭で、そうした味の文化の伝承が行われていないのは、誠に残念に思う。ところが先日、「おばあちゃんからの引き継ぎです」とおっしゃって、手作りのようかんを持ってきてくれたお檀家さんがいらつしやつた。どちらかというと苦手な私も、甘すぎなくともおいしいうようかんに、二つ三つとつまんでしまつた。

またあるお檀家さんは、おばあちゃんが毎年梅干しを作っていて、亡くなるまで、「あなたはこのことしなくていいわよ」と言われたそうだが、その奥さんは「やつぱりやめられなくて、続けています」とさらりとおっしゃつた。我が家でも数年前より梅干しを毎年作っているが、やはり自分の家で作る梅干しは、添加物がなく安全で確かにおいしく感じる。

食の文化を伝承するのは、プロの職人だけではなく、家庭の主婦であり、それこそご年配の大奥様の腕の見せ所のはずである。たとえ腕は振るえなくとも、味をみ、言葉で指導するなどのことをして頂き、是非手作りの味、家庭の味を次の世代に伝えて頂きたいものである。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

村田洋一

小村正孝

石上俊教

佐山哲郎

編集顧問

大室了皓

浄土

六十三巻三月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成九年二月二十五日

発行——平成九年三月一日

編集人

宮林昭彦

印刷所

株式会社 平文社

写真植字——株式会社 シーティーイー

〒一〇五 東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七

FAX〇三(三五七八)七〇三六



みんな、自分の星を追いかけている。

駆けぬける 喉ごし。

息もつかせぬ爽快感。おいしいビールは、
喉をまっすぐに走ります。胸に一本の滝をつくります。
やすらぎと勇気をあたえてくれるもの。あなたの金星、黒ラベル。

サッポロ〈生〉黒ラベル



ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ

ご協力をお願いいたします。酒類の製造は午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社

Cima, Cima.



ここにニッサンの最高があります。新しいシーマ

シーマがあることで、あなたの生活にどんな感動と満足が生まれるだろうか。私たちは今、大きな自信を持って話せます。技術を注ぎ、性能に妥協せず、あらゆる状況で、「これぞシーマ」の乗り心地を楽しんでいただけると。あなたがクルマに理想として求めてきたことが、こんどのシーマに実現できたと。すみずみまで「ニッサンの最高」にふさわしい仕上り。風格と躍動感。ひとたび走り始めれば、そこにはもっと深い歓びが待っています。シーマ！シーマ！あなたの熱い賞賛の声が聴こえそうです。日本車初。全車、SRSサイドエアバッグ標準装備。運転席・助手席に装着。側面衝突時の胸部に加わる衝撃を緩和します。大きく進化した4.1ℓ V8エンジン搭載。シーマのために開発。優越感あふれるスペックが、滑らかで力強い加速を生みます。



Photo: シーマ 41ℓ V8 ボディカラー ダークブルー・イッシュブラックツートーン (P) (※4S9・特別塗装色) 本革シートはメーカーオプション ●全長4970×全幅1820×全高1445(mm) ●エンジン V8 4130cc TWINCAM ●最高出力270ps/5600rpm(キット値) ●最大トルク38.4kgm/4000rpm ●運転席・助手席SRSサイドエアバッグ ●デュアルエアバッグ(運転席・助手席SRSエアバッグ) ●ABS(アンチロックブレーキシステム) ●V-TCS ●AVシステム(TV機能付) ●運転席オートドライビングポジションシート ※一部車種に搭載。シーマのお求めは、お近くのローレル・スカイライン各販売会社へ。

スピードおさえて、いい運転。
シートベルトをしめましょう。

LIFE TOGETHER
 NISSAN

人間のやさしさをクルマに。